角屋克子　　INDEX

（平和を願って）
沖縄の闘いが日本の未来をつくっていくと実感　沖縄・辺野古・高江ツアー　（2015. 5）
神戸市議会総務財政委員会傍聴　（2015. 10）
沖縄・辺野古と高江へ　（2017. 4）
スペインへ行ってきました!　（2023.11）
（改憲論議をめぐって）
義雄さんと憲法誕生　（2020. 6）
（読んだ見た聞いた）
詩人・尹東柱（ユン・ドンジュ）を知っていますか？　（2019. 5）
保阪正康さんの最後の講義　（2023.8）
（会のあゆみ）
12・27たんぽぽおはなしの会　（2015. 1）
たんぽぽお話の会（8 月例会）　（2017. 109
ざっくばらんに語ろう　（2015. 1）
（エッセイさまざま）
私のふるさと　（2022.12）

（平和を願って）

沖縄の闘いが日本の未来をつくっていくと実感
沖縄・辺野古・高江ツアー（2015. 5）

狩場台　　角屋克子

私たち、子どもと守る 9 条の会 3 人は、4 月 5 日から 8 日まで沖縄へ行ってきました。5 日は、翁長知事と菅官房長官の対談が行われ、6 日は、県内の国会議員や地方の議員 84 名がキャンプシュワブゲート前に集結し、保守から革新まで連帯して座り込みするなど、運動の重要な盛り上がりの場面を見ることができました。

沖縄到着後、すぐに辺野古へ。美しくおだやかな海が目の前に広がっていました。闘い続けている地元の人から説明を受け、カンパも届けました。そして、キャンプシュワブゲート前に移動しました。ゲート前では、参加者の交流が行われていました。私たちも、神戸の 9 条の会から来たこと紹介すると、みなさん喜んでくれました。

翁長知事と菅官房長官の対談の翌日「沖縄タイムス」は、大きな見出しで「辺野古断念を要求」と報道。翁長知事の全文が公表されていましたが、その内容は、沖縄の苦難の歴史にふれながら、県民の長年にわたる基地被害の実態を語り、新基地は沖縄の発展につながらないと具体的に説明。そして、県民に苦しみを与えておいて、世界一危険な飛行場の危険除去のために、代替施設を沖縄が負担しろ、代替え案をもっているのかという話がされること自体、日本の政治の堕落ではないかと痛烈に日本政府を非難。その堂々とした発言に県民があついエールを送っていました。タクシーに乗っても、お土産屋さんでも新基地はいらないという人たちばかりでした。

6 日は、「県内の議員さんたちの座り込み」集会が行われ、各議会ごとに代表が決意を述べていました。

沖縄は今、島ぐるみで新基地反対の運動をしていることに力強さを感じました。

5 日の夕方には、沖縄北部の「東村・高江のヘリパッドに反対するテント」へ行きました。こちらは、1996 年の SACO 合意に基づいて、米軍の北部訓練場の半分を返還するかわりに、オスプレイのヘリパッドを高江の村に移設されることになり、すでに 2 箇所建設されてしまったとのことでした。ここでも、住民が立ち上がり抗議活動を続けています。

オスプレイの被害については、生態系がこわされる他にも、オスプレイには、オートローテーション機能がなく、墜落しやすい機能であることなど事故が多発していること、墜落すればプロペラが地面に激突し、機体が傷つかないようにプロペラがずたずたに裂けて散乱するように設計されていること、離着時の激しい爆音・爆風があり、下に向けて噴射される光熱の排気で火事が起きているなど。詳しくは、ブログで。

辺野古も高江も、住民たちが体をはって闘っている姿に、本当に勇気づけられました。沖縄の闘いが日本の未来を作っていく。私たちも、一緒に闘いたい。そんな思いを胸に帰ってきました。9 条の会のみなさん、沖縄へ行きましょう。 沖縄を知り、沖縄から学びましょう。カンパや激励も送ってください。

名称は、辺野古は、「島ぐるみ会議」、高江は「やんばる東村高江の現状」で検索してください。

「安保関連法2法案について慎重審議を要請する意見書提出を求める」陳情が採択されました。

～神戸市議会総務財政委員会傍聴～ （2015. 10）

9月17日　国会での安保関連法案が重大な山場を迎える中、「安保関連法案に反対するママと有志の会@兵庫の会」は、神戸市議会に「安保関連法 2 法案の慎重審議を求める意見書を国に提出してください」という陳情書を提出しました。この日は、安保関連法案の廃案をもとめる2つの請願も出され、同じく審議されました。

安保関連法案に反対するママと有志の会@兵庫の会の口頭陳述には、3ヶ月の息子さんがいるママが陳述。とても、緊張した様子でしたが、気持ちをこめて、平和な日本で子どもを育てたいということを切々と訴えました。

市議会の中で、各党が採択・不採択の立場を表明し、意見を述べていました。

自民党は、抑止力のためには必要だ。戦争法案ではないと不採択と主張。

公明党は、新三要件で、どこまでも専守防衛を貫く。集団的自衛権は、我が国の国土を守ると断言し、戦争防止法案だと主張。ヘイトスピーチと安保反対運動を同じだと述べ、傍聴席から怒りのつぶやきが聞かれました。右傾化と左傾化と闘うのは、公明党の役割だと述べ不採択を主張。

しかし、この法案は、維新の党・民主党・日本共産党・新社会党・の賛成で採択されました。

これは、画期的なことです。そして、国会が緊迫する中で、採択された陳情書を、10月23日の本会議を待たずに、意見書をまとめようと野党議員が動いてくれましたが、残念ながら、野党議員の意見もわかれたようで、緊急の意見書は出ませんでした。（本会議でどういう形になるのか、今のところわかりません）

神戸市議会の委員会の傍聴は、初めてでした。議員さんたちの後列に神戸市の人たちがたくさん出ていて、傍聴者は、端っこにすわり、音も聞こえにくかったです。改善してほしいと思いました。

市議会へ働きかけたママと有志の会は、発足2ヶ月で陳情書を提出し、各党を周り、対話して、採択させました。このパワーは、これからも発揮されるでしょう。

19日未明に、憲法違反の安保関連法が成立しましたが、ママと有志の会は、安保法に反対する会として、再スタートしています。

角屋克子　（狩場台）

沖縄・辺野古と高江へ（2017.４）

角屋克子　（狩場台）

「沖縄へ行くならお手伝いしますよ」という知人の言葉に甘えて、2年ぶりの辺野古と高江へ、９条の会メンバーと一緒に行ってきました。

辺野古の工事の様子は、陸からは遠くてみることは出来ません。キャンプシュワブ前の座り込みをしている所へ、連帯の挨拶とカンパを届けに行きました。87歳の島袋文子さんも、座り込みをしていました。

なぜ、沖縄のおじいとおばあが、ここまで頑張れるのか。そのことは、沖縄で購入した本「沖縄戦・最後の証言」森住卓著に書かれてあります。

「悲惨な戦争を二度と繰り返してはならない」「戦争につながる人殺しの為の基地は作らせない」。島袋さんも、沖縄戦で、目の不自由な母親と弟をつれてにげまどい、ある晩、水をほしがる弟に飲ませて、翌日見ると死体が浮いて真っ赤な水だったと書かれてありました（この本、是非お読み下さい）。

必死で生き抜いた島袋さんの決意の座り込みを見ました。この闘いは、絶対に勝つと沖縄の退職教員のグループの人から力強い挨拶もありました。私たちが集めたカンパも、喜んでくれました。

一方、オスプレイのためのヘリパッド建設が強行された東村高江にも行って来ました。

突貫工事のため、ヘリパッドは、ぶよぶよしていて使えないそうです。それにもかかわらず、17名の警備員が交代で立ち続けていました（この警備費の増加で工事費が6倍にはねあがった。すべて税金です）。

この東村高江では、ベトナム戦争時、村民をベトナム兵として、訓練をしていたということを最近知りましたが、枯葉剤もまかれていたそうで、高江の男性は早死が多かったと聞きました。一つ一つの事実が衝撃です。

一体、誰のためのヘリバッド建設なのでしょうか？　沖縄の人たちの命がけの反対にもかかわらず、基地建設を推進し、ヘリパッドを強行する安倍政権。この事実を沢山の人に知らせたいと思いました。

辺野古も高江も、闘いが続いています。「どうぞ、この現状を見て下さい。現地に来て下さい。」と言われました。「帰ったら、伝えます」と約束して帰ってきました。

スペインへ行ってきました！（2023. 11）

角屋 克子（狩場台）

暑い日が続く中、旅行会社のツアーで、スペインのマドリッド→グレナダ→バルセロナと世界遺産を巡ってきた。9 月 6 日から 14 日。

マドリッドでは、ピカソのゲルニカを見てきた。世界一の反戦画は、迫力があり、亡くなった子どもを抱きかかえ苦しむ母親の絵が、まず、目にとびこんできた。

1936 年スペインの内戦に介入したナチスドイツやイタリア軍がスペイン・バスク地方にある村ゲルニカを無差別攻撃した出来事を主題とした作品。（1937 年）

「ピカソは、芸術をとおして、戦争の結末を強調し、戦争の名誉よりも恐ろしさを描くことで、軍事行動の意味を考えるように促した。これは、当時としては、画期的なことだった。」という解説文を改めて読み、今の状況と重なった。現地ガイドの日本人女性が、広島原爆資料館を思い出しますと語ってくれた。

そして、バルセロナの「サグラダ・ファミリア」が、印象に残る。

140 年も建設が続く「サグラダ・ファミリア」は、建築家アントニ・ガウディの没後 100 年になる 2026 年完成を目指しているそうだ。

ガイドさんによると、2027 年になりそうだと話していた。サグラダ・ファミリアが建設されたのは 1882 年。当時、産業革命の影響で「貧富の差」が拡大し、疫病がはやり、戦争の足音が近づいていた。人々は、不安で祈りを捧げる教会を作ろうと、わずかなお金をだしあった。その時、新進気鋭の建築家ガウディに建設を依頼した。しかし、思うように資金は集まらず、建設は何度もストップした。ガウディは、先頭にたって、資金を集めた。今も、サグラダ・ファミリアは、入場料と寄付金だけで建設されている。

ガウディは「私が、この聖堂を完成できないことは、悲しむべきことではない。必ず、あとを継いだ人たちが現れ、より壮麗に命を吹き込んでくれる」という言葉を残している。あとに続く人たちを信じる、この強さと優しさに私は感動する。ガウディは、グエル公園も、建築している。立体的に作られ、雨水を溜めて、水を活用する設計で、環境を大事にする発想がすでに考えられていたようだ。

世界遺産があちらこちらにあるスペイン。芸術・文化の力を感じた。100 年以上前に生きた人たちが、現代に生きる私たちに強いメッセージを送ってくれていると感じた。

（改憲論議をめぐって）

義男さんと憲法誕生（2020. 6）

角屋克子　　（狩場台）

5 月 2 日放送の NHK の E テレで、「義男さんと憲法誕生」を見ました。
（以下、放送内容の書き起こしもいれながら、内容を紹介します）
義男さんとは、鈴木義男さんという憲法九条誕生に深く関わった人です。1894 年福島県生まれ、福島の人に「ギダンさん」と愛称でよばれていました。
1946 年 7 月衆議院小委員会で GHQ 草案をもとにした帝国憲法改正案の条文が追加修正されました。この度、憲法草案の速記録が公開され、義男さん（当時、社会党の衆議院議員）が、司会の芦田均委員長の次に多い発言回数だったことがわかりました。憲法九条誕生の舞台裏に迫る内容でした。

改正案　第九条「国の主権の発動たる戦争と武力による威嚇または武力の行使は他国との間の紛争の解決の手段としては永久にこれを放棄する。陸海空軍その他の戦力はこれを保持してはならない。国の交戦権はこれを認めない」
義男さんがどんな追加の提案をしたのか。
「軍備を捨てるということは、一寸、泣き言のような消極的な印象を与えるから、先ず、平和を愛好するのだということを宣言しておいて、その次にこの条文をいれようじゃないか。他の議員も同調して、何か付け加えようじゃないかと議論を深めます。
改正案には、平和の二文字はなかったのですが、委員長の芦田均の案に基づき議論に議論を重ねて、今の九条にたどりつきました。
第九条「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と武力による威嚇武力行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」

憲政史家・和光学園理事長の小関彰一さんは「平和という言葉をいれるべきだ。日本国民の意思だということをいれたい。みんなが少しずつ譲歩しながら言葉を選んで最後は「国際平和を誠実に希求しという言葉がやっとできた。みんながもう二度と戦争は懲り懲りだという気持ちが政党の区別なしに、しょうがないから戦争を放棄するのではなく、積極的な意味をいれたと。そこではみんな一致したんだと思う」と話していました。
また、義男さんの孫で「国際政治学者の油井大三郎さん」は、祖父である義男さんが憲法に託したおもいを問い直しています。「第一次世界大戦の悲劇を繰り返さないための努力が、ヨーロッパでは始まっていたと実感したんですね。国際連盟であり、不戦条約であったと。しかし、それは挫折

してしまう。日本自身が今度は大変な悲劇に直面するわけですから、今度は日本人自身の問題として戦争を二度と繰り返さない制度を作らないといけない。そういう悲痛な願いの中で 9 条が登場してくる。第二次世界大戦の反省から国際連合ができる。新しい平和維持の国際構想の中に九条を積極的に位置づけていく。そういう発想が祖父にあったのではないか」（油井さんのおはなし）。義男さんに影響を与えたのは、二度にわたる世界大戦の教訓だったということです。

以上、放送を見て私が感じたことは、憲法九条は、相当な覚悟をもって、悲惨な戦争を再び繰り返さない制度としてつくられたということです。実際、戦後 75 年海外へいく戦争はしていないということは、その制度が間違っていなかった証です。

鈴木義男さんは、九条を国際平和に役立てようとしたわけですから、その思いは、憲法前文と九条にこめられていると思いました。

もし、この条文に自衛隊の文字が加わることがあれば、九条の意味が成立しなくなると思いました。憲法九条の意味を深く知ることができた放送でした。困難な中でも、「九条の会」の活動を続けている私たちは、義男さんたちが苦労して作った憲法を受け継いでいるという気持ちになりました。

なお、放送では 25 条についてもふれられていました。

（読んだ見た聞いた）

詩人・尹東柱（ユン・ドンジュ）を知っていますか？（2019. 5）

角屋克子　　（狩場台）

NHKのEテレで「尹東柱を読み継ぐ人びと」という番組を見ました。尹東柱（ユン・ドンジュ）は、1917 年生まれ、植民地支配の中で、苦悩の末、創氏改名し日本へ留学。1942 年同志社大学に通っている時、治安維持法で逮捕されました。当時の治安維持法では、朝鮮の歴史や文化について人と話しただけでも逮捕されました。1945 年 2 月 16 日福岡刑務所で獄死。死因はいまだ解明されず、拷問か生体実験だといわれています。

尹東柱は、学生の時数々の詩を書き、手製の詩集を友人に送っていました。その詩集が戦後まで保管され、出版されました。その尹東柱の詩を読み継ぎ、語り合う人たちが登場する番組でした。25 年も続く「福岡・尹東柱の詩を読む会」では、一般市民・在日三世・大学生が尹東柱について率直に語り合う姿が印象的でした。

日本聖光会奈良基督教会司祭の井田泉さんが尹東柱について語り、詩を井田さんが訳されています。代表的な詩「序詩」の中に、「自分が尊いと思うものに対して、恥じない生き方をしたい」という一節があり、ここに惹かれたのだと語っていました。また、自分の属する教会が戦時中に戦争協力をしていたことを謝罪し、事実をきちんと認めることの大事さを優しく語っていました。

さらに、尹東柱を記念する立教の会代表の楊原泰子さんも、尹東柱の東京での足跡をたどりながら、「結局、一人ひとりの心を変えるのは文化ですよね。言葉ですよね。その証拠に没後 70 年以上たっているのに、尹東柱の残した言葉が私たちにいろいろなことを教えてくれたり、感動を与えたりする」「正しいことを伝えたい。正しいことを伝えないと正しい未来はない」と話された。

紙面の都合で紹介できませんが、日本で尹東柱の詩を読みついでいる人たちがいること、また、尹東柱について学ぶことが歴史の事実を知ることになっていると思いました。多くの人に尹東柱を知ってほしいと心から思いました。（子どもと守る 9 条の会ニュース 4 月号掲載分から抜粋）

尹東柱の代表詩　序詩

保阪正康さんの最後の講義（2023.8）

角屋克子（狩場台）

NHK の E テレで、ノンフィクション作家、保阪正康さんの講義を聞いた。保阪さんは、軍や政治の指導者から兵士にいたるまで 4000 人を超える人に直接会い、話を聞いたそうだ。
「私は、83 歳。私の体の中にいろんな人の証言が入っている。私が死んだら消えていくのがもったいない」と、若い人たちに話す。私が、特に心に残った話を紹介したい。

ある時、中国での加害について語ってくれた人に、「お茶の間ではなく、荒川の土手で聞きます」というと「君は、よくわかっているなぁ。先日、家で戦争の加害について話した時、息子が聞いていたようで、息子は、お父さん、そんな酷いことをしてきたのかと家を出てしまい、帰ってこない」と、言われた。戦争体験を語るということは、人生をかけて話しているのだ。私たち聞く側も、その話を受け継ぐという覚悟が必要だ。

今の若い人たちは、戦争の話を江戸時代の話のように思っているところがある。歴史は、地続きだ。270 年一度も戦争をしなかった国が、明治 27 年から 10 年おきに戦争をした。最終的には、昭和 16 年 12 月 8 日から始まった太平洋戦争で、日本は軍事的に解体した。
これは、どうみたって極端から極端で、特に戦争末期になると近現代の戦争のルールを無視して戦った。特攻隊だ。慶応大学の上原良司（1922～1945）という青年の遺書が遺っている。「私は、自由主義者です。本来、人間は自由主義に生きるのが最もふさわしい動物だと思います。そのような

意味でいうと、日本やドイツのようなファシズムの管理体制の国が、戦争に不利な状況になっているのは、私にとって非常に喜ばしいことです。しかし、私は、一機械となって、特攻隊員として、明日、死んでいきます」こういった遺書は、3900 人の学徒兵の中で、たくさん遺っている。

日本の指導者たちは、主観的願望を客観的事実にすり替えて戦争をする。それが日本の指導者たちの特質だ。そして、国民に戦争協力への説明もなかった。指導者たちは「大衆は、愚昧である。無知である。本当のことを話すとがっかりする。戦う気がなくなる。」公然と言っていた。国民を愚弄している。

以上、保阪さんの講義の一部を紹介させていただいた。本当は、3 時間の講義で、1 時間の放送では、わからない点もある。しかし、貴重な講義だった。たくさんの若い人たちに聞いてほしい。

（会のあゆみ）

12. 27　たんぽぽおはなしの会（2015. 1）

12月27日、たんぽぽおはなしの会が開かれました。

朝まで大雨が降り、年末ということで、子どもたち来てくれるかなぁ？と心配しましたが、14名も来てくれました。若いお父さん・お母さんが9名、私たちスタッフも入れて34名になりました。

毎回、チラシだけで、よく集まってくれるね・・とスタッフの実感です。

今回は、絵本と紙芝居の間に、手遊び、手品、「新聞紙で遊ぼう」がはいり、絵本にぐっと集中している子どもたちでした。

絵本「平和ってどんなこと？」の中に「平和って、僕が生まれてよかったということ。君が生まれてよかったということ」という一文があり、心をこめて子どもたちに向けて読みました。

絵本を通じて、平和の大事さを子どもたち、若いお父さんやお母さんたちに伝われば・・・と思います。　（角屋克子）

たんぽぽお話の会（8月例会）（2017. 10）

夏休み最終の日曜日、どれくらい来てくれるだろうかと心配しましたが、親 9 名、子ども 14 名が参加してくれ、スタッフ合わせ 33 名になりました。

今回は、幼児さんたちが多く、お話の合間に「手遊び」を何回もいれると大好評。現役保育士さんの上手なリードでなごやかな雰囲気でした。音楽の力と人と触れ合う楽しさ。子どもたちの笑い声が響きました。

沖縄・与那国島のあさとゆうき君の詩でつくられた「へいわってすてきだね」の絵本の読み聞かせのとき、ぐっと集中している子どもたち・パパ・ママたち。あぁ、本当に平和が続きますように・・・と多くの人が感じたことでしょう。

最後に、そろそろ飽きてきた子どもたちに「海辺のハリーとへいわってどんなこと？どっちがいい？」と尋ねると「へいわってどんなこと!」と返ってきて、少し、びっくりしました。この絵本は、ずっと読んでいるので知っているのか・・・それとも、何か不安を感じているのか。それは、わかりませんが、子どもたちの反応に、驚いた私たちです。最後に、ビュンビュンごまを作って遊び、交流もしました。

「また、次回もしてくださいね」と若いお母さんからの要望がありました。

狩場台　　角屋克子

ざっくばらんに語ろう（12月例会）　（2018. 1）

12 月 16 日の例会は意見交換会「ざっくばらんに語ろう」でした。

まず、運営委員の O さんから、憲法改正のための国民投票がおこなわれるかもしれない中で、今の現状について冷静な分析や提案がありました。次いで、14 名の参加者に、それぞれ思っていることを話していただきました。

皆さんが共通して感じていることは、「マスコミの酷さ」でした。沖縄の問題や原発再稼働禁止の判決など、私たちが知りたい事はなかなか報道されない。トランプ大統領が来日した時、まず横田基地に来たことは、大変驚きである。マスコミは批判もなく報道していた。

このようなマスコミの中で国民投票が行われるという恐ろしさを感じました。

私たちが、国民投票で勝利するには、どうしたらいいのだろうか？

草の根の運動を拡げることが重要だと言う意見がでました。その為には、身近な人に声をかけてみよう。ご近所と話をしてみよう。カラオケなどでも気軽に話をしてみる。 署名（3000 万署名）が断られた経験を持ち寄る・・など、具体例もだされました。

そして、I 会員から、憲法 9 条の 3 項に自衛隊が明記されることについて、例え話で分かりやすい説明をしていただきました。2 項で否定をしても、3 項で肯定すれば、1、2 項の意味が半減してしまう。もし「自衛のための軍備については、これを保持できる」と加えられれば、自衛隊が自由に海外へ行くことができてしまう。

改めて、9 条改正の恐ろしさを感じました。

参加者一人ひとりが、現状に危機感をもっている。それを何とか、形にして、表現したいと思いました。　　（狩場台　角屋克子）

私のふるさと　（2022.12）

角屋克子（狩場台）

私のふるさとは、長崎県の西にある五島列島です。大小 152 もの島がありますが、人が住んでいるのは、11 の島です。私は、若松島という五島列島のちょうど真ん中あたりにある島で生まれ、7 歳まで過ごし、その後、11 歳まで一番大きい島、福江島で育ちました。

その後、神戸に転居しました。

2018 年長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産が世界文化遺産に登録され、観光客が増えたようです。家は、仏教なので、カトリックの教会が近くにあっても行くことはなく、隠れキリシタンの歴史に関心ももたずにきたように思います。

五島を出てから、五島でおきたことで、衝撃をうけたのは、「カネミ油症事件」です。

「カネミ油症事件」は、1968 年カネミ倉庫（本社北九州）が製造する食用油にポリ塩化ビフェニールなどのダイオキシン類が混入した大規模な食中毒事件です。

被害は、世代をこえて、子どもの代まで続いているが、救済されていないと被害者が訴えています。1969 年まで五島に住んでいた私が被害者になっていたかもしれません。五島では、奈留島や福江の玉之浦で被害者が多かったようです。奈留島で育った女性が、被害にあって、苦しくて命を断とうとしたけれど、長崎へ向かうフェリーの汽笛を聞きながら母親を思い出し、思いとどまったという話は、本当に胸が痛くなる思いです。

五島では、11 年しか住んでいませんが、やはり、「私のふるさとは、五島です」と言ってしまいます。人は、幼い記憶も大事で、その風土で感じたもの、影響をうけたものが、何かあるのだと思います。私の場合は、それを今から探そうと思います。今、92 歳の母親が五島で暮らしています。母の生い立ちの記をまとめているところです。